

## わたしの星



神 沢 利 子

星の名を知ったのはどの子も同じように、七夕の織姫さま  
彗星さまであり、天の川なのだろうか。

たぶんわたしもその頃、北斗七星をおぼえ星を仰ぐことを  
知ったのだろう。

白夜に近い北国の夏の夜であった。南サハリンのヤナギラ  
ンの紅の燃える原野の上には、ただただ限りなく広い大空が  
ひろがっていて、夜ふけても仄明るいその空に、星は夢のよ  
うに瞬いているのであった。ヤナギランの綿毛が風に舞いと  
び、やがて、果てもなく雪の降りつむ冬がきて、原野も川も  
白く凍りついてしまう。

冬は夏とは反対に長い長い夜が続いた。

ネオンのない漆黒の空にきらめく星々は、音を発するよう  
につよくかがやいていた。

病気で中学を休んでいた兄が、よく星を眺めていた。その  
兄に教えられて琴座に鷲座、白鳥座にカシオペア、オリオン

とさまざまな星座をおぼえた。七夕で親しい織姫や彗星も別  
の名で知り、北斗七星が大熊座であるとは、それもふしぎで  
ならなかった。

『星座巡礼』(野尻抱影著)という本を知ったのもその頃で、  
たしかその冒頭には、年に一度、まわってくる旅回りのサー  
カスとうたって、ブレイアデス星団や星々の名がかきつらね  
た詩がのっていた。小学生だったわたしは兄にくつついて雪  
の丘に頬を凍えさせながら、星空を仰いでいたものだった。

澄み切った冬空にかがやく星は、あまりにそのひかりがつ  
よいので、まるで無数の星の目に射すくめられるような気が  
した。そして何光年という気の遠くなるような遠い彼方にあ  
る星々――

果てもない宇宙に恐しさが湧いて、思わず顔をおおってし  
まうこともあった。

それからはかに琴座に鷲座、白鳥座にオリオン。いろんな

星座をおぼえたけれど、北斗を見る時、ふしぎにこころが安らいだ。

亜寒帯とよばれる北の果てにくらすと、北斗は特に親しい星であった。だれが見てもすぐわかるひしゃくの形をした北斗七星は、方角を示す北極星のガイドの星だ。太古からの旅びとたちが、この星を仰いだ時のこころの安らいと明日の旅路への励ましがそのまま、わたしにも伝わるのだろうか。

北斗とオリオン。あの雄々しい冬の星座はなぜかわたしの星のような気がしてならなかった。

☆

十三の夏、東京へきた。病弱で休学をしていたが、よく二階の窓からこっそり屋根へ下り、猫のように屋根に坐って星空を仰いだ。北冠という星。冠の星をあたまにのせることをうっとり夢みているわたしの前に、突如、体温計や水枕のかたちの星々が現われ、悪意に満ちた目くはせをするのだった。敗けるものかと舌をだしたり睨んだりするのだが、たまらなくなつて部屋へかけこみ、ふとんにもぐりこむ。だがその隠れ家にも憎らしい星めは注射針やピンセットや同類をひきつけてのりこんでくる。あたまからふとんをかぶつたその中の暗い宇宙空間。歯をくいしばるわたしの耳に、いつもく

る医者黒い幌の人力車の、死者の使いのような不吉な音ががらがらとこだまし、ああととりすがる思いで見あげる星の冠は光茫を失って、はかなく薄れ、(はて、わたしは死んだのか)と、そのころのわたしは幼い詩を結んでいる。

☆

おとなになつて星を仰いだのもふしぎに病気のころだ。

夏も終りに近い日のこと、未明におきて息すれば痛む手術後の胸をかばいながら、手洗いから戻る長廊下は虫の声の中にあつた。絶えいるように鳴いてはまた湧きあがる虫の音に誘われて、おぼつかない足どりのまま庭へおりたつと、まだ明けやらぬ群青の色濃い大空に、星がまたたき、「あ、あれは三つ星」今、この夏の空に？ と、いぶかしく見上げると、三つ星を囲む四つ星も見えて、それはたしかにオリオンなのであつた。胸のうちをふしぎに熱いものがつらぬいていき、虫の音のただ中で、空が白み、星々が消え失せるまでわたしは立ちつくしていた……。

そしてその日わたしのこころは、しずかなよるこびに満たされていた。この昼のまはゆい空にもあのオリオンが、冬の星々が正しい位置を占めてかがやいていることを信じていた。

(児童文学者)